



2

## 【ひろばの風】

聖カタリナ大学と Well-being

聖カタリナ大学 副学長

看護学科教授 野村 美千江



3

## 【Campus News】

- ・あいテレビのテレビ番組「えひめ『スマ塩』応援団」に撮影協力
- ・北条小学校にて健康スポーツ学科の出前教室「パラスポーツたいけんきょうしつ」を実施
- ・学校法人聖カタリナ学園創立100周年記念「ヨハネ・パウロ2世美術館展」の開展式 他

4

## 【Campus News】

- ・第69回全日本東西対抗剣道大会に健康スポーツ学科馬越千里助教が西軍選手として出場し優勝
- ・2023年度愛媛銀行寄付講座・聖カタリナ大学「風早の塾」の開講
- ・第6回スポーツ・レクリエーションフェスティバルin風早を開催 他



5

## 【Campus News】

- ・本学留学生 愛媛の3大学留学生で行くしまなみバスツアーに参加
- ・第64回中・四国保育学生研究大会に参加
- ・看護学科4年生が第54回(2023年度)日本看護学会学術集会「学生企画」に登壇 他



第64回中・四国保育学生研究大会



# カタリナ ひろば

Vol.36  
2024.2

聖カタリナ大学  
聖カタリナ大学短期大学部  
[www.catherine.ac.jp](http://www.catherine.ac.jp)

6~8

## 【Campus News】

- ・看護学科の学生たちが人命救助で表彰
- ・令和5年度学長賞を授与 他

「令和6年能登半島地震被災者支援」募金について

【ご寄付のお願い】  
教育振興募金のご案内

9

## 【ようこそ就職課へ】

就職課長補佐 蔵前 純二

10

## 【ESSAY】

映画館とカウンセリング  
聖カタリナ大学人間社会学科  
黒田 卓哉

11

## 【ゼミナールインタビュー】

人間健康福祉学部  
社会福祉学科  
近藤 益代ゼミ

12

## 【クラブ紹介】

女子バスケットボール部

## 【教員著書紹介】

『地方発 多文化共生のしくみづくり』  
村岡 則子・大黒屋 貴裕  
(聖カタリナ大学教授・晃洋書房)地方発  
多文化共生  
の  
しくみづくりいま、日本の地方部にこそ  
多文化共生の標準装備を！  
大黒屋 貴裕 (著) 村岡 則子 (著)  
『地方発 多文化共生のしくみづくり』  
晃洋書房

# 聖カタリナ大学と Well-being

聖カタリナ大学 副学長 看護学科教授  
野村 美千江

松山市駅キャンパスのクリスマス

2023年5月 COVID-19が感染症法上の5類に移行し、日常生活が平時に戻りつつある。2020年3月世界保健機関 (WHO) によるパンデミック (世界的大流行) 宣言、同年4月日本初の緊急事態宣言が発出されてから約4年、ようやくである。1918～1921年に世界で大流行したインフルエンザ (通称スペイン風邪) では、我が国の感染者数は2380万人、死者数38万9千人であった。COVID-19は2023年5月までの累計で感染者数約3380万人、死者数約7万5千人であり、百年前のパンデミックに比べ、幸い致死率は低く抑えられた。

この間、感染症専門家の中で話題となったのがナイチンゲールの教えである。ナイチンゲールは人々の健康をまもる上で最も重要なことは「新鮮な空気である」と唱え、換気の必要性を説いた。1820年にイギリス貴族の家に生まれ、34歳で看護部隊を率いてクリミア戦争に従軍したナイチンゲールは、兵士死亡の主原因が兵舎の劣悪な環境であることを統計的に示し、換気・日光・暖かい食べ物・清潔な寝衣等の環境を整えることに尽力した。その普遍的な教えは現代に引き継がれ、家庭や病院・福祉施設など、人々が生活を送る場において最低限必要な要素となっている。

さて、感染症同様に気候変動、貧困、紛争など、地球上に暮らす我々は多くの課題に直面している。2030年までに達成すべき「持続可能な開発目標 (SDGs)」の目標3に「すべての人に健康と福祉を (Good Health and Well-Being)」とある。Well-beingは、1940年代にWHOが健康の定義で使用したのが最初とされる。WHO憲章で“Health is a state of complete physical, mental and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity.”と「健康」を定義。日本語訳は「健康とは、病気でないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあること (日本WHO協会訳)」である。

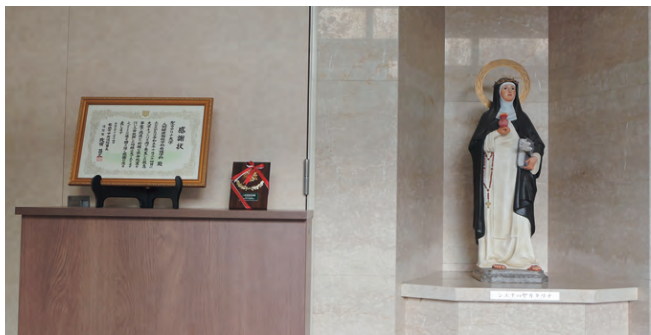
Well-beingが今、改めて注目されるのは、ものの豊かさより心の豊かさを求める人々の価値観の変化、そして不確実な社会情勢によるところが大きい。感染症や武力衝突の脅威を日々実感しながら生きる我々が希求するのは、個人と社会、両方の幸せであり、一人ひとりの心身の健康と国際社会の調和である。Well-beingは、福祉分野では「福祉」、心理学分野では「幸せ」、医療分野では「健康」と訳されることが多く、スポーツの分野でも重視される概念となった。アスリート間のリスペクトやスポーツを楽しむ文化の醸成が豊かな人生や地域社会づくりに貢献するからで

ある。

2008年の人間健康福祉学部新設にあたり、当時の学部長は、「歴史ある社会福祉学部から人間健康福祉学部への名称変更は『ウェルビーイング』の具現化を目指した」と語っている。2011年に人間社会学科、2014年に健康スポーツ学科、2017年に松山市駅キャンパス看護学科、2022年に大学院看護学研究科を新設。そして、2024年度から、大学は人間健康福祉学部と看護学部 (大学院併設) の二学部体制となる。学際的に Well-being を問い直し、社会福祉学・心理学・スポーツ学・看護学・介護福祉学・保育学の発展に寄与する環境が整った。

2024年は波乱の幕開けであった。元日には石川県能登半島で大地震が発生、翌2日は羽田空港で航空機衝突事故。ショッキングな出来事が続き、心身面に影響を受けた人は多かったであろう。学内では募金活動が行われ、皆で能登地方に心を寄せているが、国内外の諸事情から否応なく不安に襲われる日々が続く。毎日、朝と夕に校内放送で流れる「始業の祈り」「主の祈り」「終業の祈り」が、どれほど心の安寧に役立っていることだろう。

1月12日、嬉しい出来事があった。昨年10月、看護学科講義棟で心肺停止状態となった男性が、学生らによる一次救命処置の後、救急搬送され、手術・療養を経て、お元気になられた姿を見せに来てくださったことである。「本学の学生・教職員の応急手当でなければ命が危なかった」と何度も頭を下げられ恐縮した。『Charity for Your Neighbours』のモットーを掲げ、思いやりの精神を柱とする大学の一員として、学生たちの勇氣ある行動を誇らしく思う (詳細は6～7頁)。全ての人々の Well-being を願い、未来を担う若者を育てることを通して地域に貢献するカトリック系大学として、より一層の精進を重ねて参りたい。



右) 松山市駅キャンパス講義棟正面入口「聖カタリナ像」  
左) 松山市中央消防署から贈られた人命救助への感謝状

# Campus News

## あいテレビのテレビ番組「えひめ『スマ塩』 応援団」に撮影協力

8月上旬、本学学生と教員があいテレビのテレビ番組「えひめ『スマ塩』 応援団」に撮影協力しました。

撮影は、岡田麻希あいテレビアナウンサーの進行のもと北条キャンパスとJAえひめ中央 太陽市（おひさまいち）で行われました。

女子バスケットボール部の学生3名が味の素株式会社の推進する「スマ塩」レシピ3品（減塩料理）を調理し、教員3名（三木佳子教授、宮良俊行教授、富田晶子シスター短大非常勤講師）が料理を試食しました。また、女子バスケと硬式野球部で栄養指導を行っている柚木亮汰氏（管理栄養士）にも参加いただき、調理方法等で助言をいただきました。



## 北条小学校にて健康スポーツ学科の出前教室「パラスポーツたいけんきょうしつ」を実施

9月12日（火）に地域連携活動として松山市立北条小学校で出前教室を実施しました。

このイベントは松山市「未来の『ふるさと松山』創造事業」の一環として行われ、SDGsの目標につながる体験活動を行うことで、次の世代に向けた、持続可能なふるさと松山のまちづくりを担う子供たちの育成を目指すものです。

当日は「パラスポーツたいけんきょうしつ～みんなでたのしめるスポーツってなんだろう～」というテーマで、本学から健康スポーツ学科の今城遥助教、乗松柚衣助教の2名の教員とそのゼミに所属する学生が担当し、北条小学校2年生61名がボッチャとフライングディスクを体験しました。参加した児童からは「難しかったけど楽しかった。」などの感想があり、楽しみながらパラスポーツの魅力を知ることができた様子でした。また補助として参加した学生も児童との触れ合いを通し、多くの気づきを得ることができました。本学では今後もこのような機会を通し、子供たちの健やかな成長に貢献していきたいと考えています。



## 学校法人聖カタリナ学園創立100周年記念「ヨハネ・パウロ2世美術館展」の開展式

9月22日（金）、学校法人聖カタリナ学園創立100周年記念「ヨハネ・パウロ2世美術館展」の開展式が行われました。

開展式には、本学園から、学校法人聖カタリナ学園理事長中田婦美子、聖カタリナ大学名誉学長ホビノ・サンミゲル、聖カタリナ大学学長坂原明が列席しました。

当日は、最初に聖カタリナ学園高等学校生徒と教員による吹奏楽の演奏があり、その後、主催者挨拶、来賓挨拶、テープカット等が行われました。

本展は四国では唯一の開催となりました。

また、学校法人聖カタリナ学園創立100周年記念特別展として、「アルベルト・カルペンティール展 ー愛と真理ー」を同時開催いたしました。



## 社会福祉学科学生による「祭りボランティア活動」

9月23日（土）に今治市関前岡村島で開催された秋祭りに社会福祉学科3回生6名がボランティアとして参加しました。

参加学生は、島民の皆様からお伺いした島での暮らしや祭りについての話に興味・関心を持ちながら聞き入っていました。また、人口減少、少子高齢化における課題も具体的に祭りの担い手不足等から実感していました。

この祭りボランティア活動を通して、学生達は島民の皆様の温かさや祭りの楽しさを認識するとともに、これからの祭りのあり方、祭りを継続する方法についても考察していました。

参加学生は人との交流の大切さや地域における生活とは何かをより意識する機会になったと思います。



## 第69回全日本東西対抗剣道大会に健康スポーツ学科馬越千里助教が西軍選手として出場し優勝

9月24日（日）に沖縄県立武道館にて第69回全日本東西対抗剣道大会が開催され、健康スポーツ学科馬越千里助教（錬士七段）が西軍の中堅として出場しました。

この大会は、剣道の真価を示すものとして全国を東西に二分し、各層における卓越した剣士を選抜して対抗試合を行うものであり、国内では最も格式の高い団体試合ともされています。馬越助教は、福井県の山田聖子選手（六段）と対戦して見事勝利し、西軍の優勝に貢献されました。



（写真：左から、山崎克弘（教士八段）刑務官、馬越助教、大城戸功（範士八段：審判員）、村上泰彦（六段）警察官）

※ご本人の許可を得て掲載しております。

## 2023年度愛媛銀行寄付講座・聖カタリナ大学「風早の塾」の開講

2021年12月に株式会社愛媛銀行と学校法人聖カタリナ学園（聖カタリナ大学）は、SDGsの推進に関する連携協力協定を



締結しました。同協定の一環として株式会社愛媛銀行のご支援を受け、産官学連携事業（愛媛銀行・松山市・聖カタリナ大学）として公開講座を開講（全9回）。

本年度は「共生社会の実現を目指して」をメインテーマに掲げ開講。

9月29日（金）、株式会社愛媛銀行頭取西川義教様をお迎えし開講式を行い、その後、第1回講座を開催しました。

## 「第6回スポーツ・レクリエーションフェスティバルin風早」を開催

11月4日（土）、市民の方々が約500名の参加のもと「第6回スポーツ・レクリエーションフェスティバルin風早」（主催：松山市文化・スポーツ振興財団、聖カタリナ大学・聖カタリナ大学短期大学部）が北条スポーツセンターで開催されました。

このイベントは松山市文化・スポーツ振興財団との連携協定の一環で開催される毎年恒例のスポーツフェスティバルです。

当日、体育館では「聖カタリナ大学杯 親子チャレンジ・ザ・ゲーム」、体力測定会・子どもの運動能力測定会、健康・運動相談コーナー、ロコモ予防啓発コーナー、ファミリーフィットネス（ピラティス・自力整体等）が行われ、陸上競技場ではグラウンドゴルフ大会が行われました。

親子チャレンジ・ザ・ゲームでは保育学科の学生がイベントの企画・運営に携わりました。学生にとっても授業で学んだ内容を活かすことができ、レクリエーション・インストラクター資格としての役割を学ぶ良い機会となりました。

体力測定会・子どもの運動能力測定会、健康・運動相談コーナー、ロコモ予防啓発コーナーでは健康スポーツ学科の教員・学生から健康に関する助言等を行い、健康管理や自身の体力についてご理解をいただきました。

今後も聖カタリナ大学と聖カタリナ大学短期大学部は松山市文化・スポーツ振興財団と協力し、教育機関として皆様の健康増進・健康管理を継続してサポートしていきます。



## 「コンソーシアムえひめインターンシップ」の研修報告会を開催

人間社会学科の3年生が11月6日（月）に「コンソーシアムえひめインターンシップ」の研修報告会を行いました。

夏期に研修に参加したおよそ30名が、2教室に分かれて報告を行いました。

コロナ禍では、学内関係者のみで報告会を実施していましたが、今年度は事業所の方々にもご臨席賜りました。

学生はあらかじめ事業所からいただいた研修評価をもとに、自己の体験を振り返り、長所や課題を検討し業界研究を深めるなどの準備を行いました。

情報交換会も兼ねており、報告会では各自、真剣にメモを取りながら聴いていました。

一人ひとりの経験や課題を共有して就職活動に備える、大変よい学びの機会となりました。



### 本学留学生 湯築小学校児童との友好交流事業に参加

11月20日（月）に、人間社会学科4年生の台湾人留学生ウ・シンユさんとファン・ユーティンさんが、“台北市との小中学校友好交流推進員”として、湯築小学校児童に台湾についての発表を行いました。

内容は簡単な中国語レッスン（挨拶や食べ物）、数字の数え方（台湾のジェスチャー）、台湾の小学校について、台湾で人気の日本アニメ、台湾の観光地についてです。

児童の皆さんも台湾について興味を示し、両名は交流を通じて日本の小学校や児童について学ぶことができました。



### 本学留学生 愛媛の3大学留学生で行くしまなみバスツアーに参加

11月25日（土）に、本学留学生と愛媛大学、松山大学の留学生でしまなみバスツアーに参加しました。

村上海賊ミュージアムでは村上海賊の歴史を学び、着物や鎧の着付けを体験しました。

天気も良く、しまなみ海道や来島SAでは景色を楽しみながら、他大学の留学生と交流することができました。



### 第64回中・四国保育学生研究大会に参加

12月2日（土）、3日（日）の両日、高知県で開催された「第64回中・四国保育学生研究大会」に保育学科2年の10名が参加しました。35校、約600名の保育学生が高知に集い、研究に取り組んだ成果を発表しました。

本学は「えいようってなあに？～地元の食材で楽しく学ぼう～」のテーマで、シナリオ・音楽・振付・道具など、学生たちが互いに意見を出し合い、工夫して作り上げた作品で、実技発表を行いました。

他校の発表を聞く中で、新たな気づきもあり、互いに学び合える機会となりました。



### 看護学科4年生が第54回(2023年度)日本看護学会学術集会「学生企画」に登壇

看護学科4年生の伊藤恋さんが、第54回（2023年度）日本看護学会学術集会「学生企画」『看護の未来を創る～私の目指す看護～』に登壇しました。全国から7名の看護学生が集い、「私が目指す看護」を発表・意見交換を行い、看護のあり方についての考えを深める機会となりました。

臨地実習を経て、4年間の成長がわかる素晴らしい発表でした。



## 市駅キャンパス看護学科講義棟における 人命救助〈命をつないだ7分間〉

### 【概要】

2023年10月24日（火）18時35分頃、松山市駅キャンパス講義棟内で、看護学科の2年生が廊下で倒れている男性を発見、ただちに心停止状態であると判断して気道確保、胸骨圧迫を実施しました。そばにいた学生らは即座に役割分担し、AEDの手配、救急車の要請、新通報システム「ライブ映像119」の操作、看護師資格をもつ教員への応援要請、傷病者の状態の記録などを実施。駆けつけた3年生や教員と連携しながら、的確かつ迅速な対応で救急隊に引き継ぐことができました。

### 【あの時を振り返って】

#### 2年生 乗松 凜

思い返すと、心肺停止の状態の方を初めて目の前にして、1人では迅速な対応ができなかったなと思いました。偶然近くに同級生がいて、先生方も近くにいる環境で本当に良かったです。また先生方の対応をみて、看護師は命に関わる仕事なんだと改めて思い知らされました。今回の経験を生かして、臨機応変な対応をとれる看護師になりたいと思います。

#### 2年生 香川 ここの

決断力と実行力が大切だと感じました。私は、傷病者を仰臥位にする提案をしました。が、頸部を損傷するかもしれないと思い、すぐに実行できませんでした。そばにいた仲間は何度も確認して、やっと決断できました。決断力と実行力を養うには、知識や技術を身につけることが大切だと思います。これからも精進します。

また、搬送された後、私は精神的なダメージを受けていました。そんな私に周りの皆さんが優しく声を掛けてくださいました。ありがとうございました。非日常的な体験をすると、誰でも疲れると思います。人命救助にあたった方、傷病者の家族の方にも気を配ることができるようにになりたいです。

#### 2年生 橋元 深緒

個々で、自分にできることや必要なことを瞬時に判断して動けたことが、状態の回復につながったと思います。不安で押しつぶされそうだったとき、木原先生をはじめ沢山の先生方が対応されているところを見て、助けられる、と非常に安心したのを覚えています。

私も、状況に応じて優先順位を考えながら、冷静な対応ができる医療者になれるよう努めます。

#### 3年生 繁宗 美空

今回私は倒れていた方に対して胸骨圧迫を行いました。蘇生



人命救助者団体表彰（松山市中央消防署2023年12月14日）

中は必死でしたが、終わってからは恐怖でいっぱいでした。しかし、自分の行動で人の命を救えたことが看護師を目指す自分にとって大きな自信に繋がりました。これからも人のためになることを進んでしていきたいと思います。

#### 2年生 公文 爽太

私は119番通報をするとともに、消防からスマホのSMSに届いたURLをクリックして、2023年春に導入された「ライブ映像119」というシステムで、傷病者がどのような状態か、現場の映像をリアルタイムで消防司令室に送るということを行いました。今回の人命救助に携わって、周りの人との協力やコミュニケーションが大切であると同時に、冷静さが重要だと感じました。

#### 2年生 濱岡 純平

今回の人命救助を通して、まずはご本人が意識を取り戻すことができたことが何よりだと思いました。

私は事務局と警備室に走って知らせた後、講義棟入口の自動ドアが18時半に閉まるので、そこに立って救急隊を誘導し、搬送経路を確保しました。実際に学生や先生方の救助をしている姿を目の当たりにした時に落ち着いて行動することの重要性を学ぶことができました。またそれと共に、自分自身が行うとなったら今のままではできないなと感じました。そんな不安を無くすために、日頃からの授業や演習、実習の時間を大切に、この時学んだことも活かし、俊敏に判断できるような看護師を目指していきたいです。

#### 2年生 玉井 千星

正直、身近でこんな事が起こるとは思ってもいませんでした。しかし、みんながそれぞれの役割を理解して、すぐに動く事ができました。私は、とにかく先生を呼ぼうと、無我夢中で走りました。その時は、とにかく早く伝えなければという思いだけで、何を話したかよく覚えていませんが、「どこで、誰が、どのような状態で倒れているかを簡潔に伝えてくれてよかった」と言ってもらえたので嬉しかったです。

みんなが、日赤での救急法を学んでいたからこそ、自然と動く事ができたと思います。このような事はないのが一番ですが、起こった時には、今回のようにすぐに対応できるようにしたいと思いました。私たちにも救える命があるのだと思え、もっと勉強して、多くの命を救いたいと思います。

#### 2年生 大野 春寧

先日のことを振り返って、AEDを持ってくることは出来ても、本当に心停止しているのか分からないため装着することは



学長特別表彰（聖カタリナホール 2023年12月20日）

出来ず、ただ見守ることしか出来ませんでした。また、倒れた方の反応や行った処置などを時間と一緒に記録しましたが、周りの人に言われたことをすることしか出来ず、率先して行動をすることが出来ませんでした。これらの自分の行動に対する後悔が沢山ありましたが、今回の出来事をきっかけに看護の知識を身につけておくことの大切さや、チーム連携の大切さなど沢山の大切なことを学ぶことが出来ました。

## 2年生 岡 和沙

今回の現場に立ち会って、私は先生方を呼びに行くことしか出来ませんでした。対象者に直接関わって処置された同級生や先輩方、先生方を本当に尊敬しました。最初に立ち会った私たちが、誰の指示もなく一人一人が必要な場所へ、無意識のうちに走ることができたのは、日本赤十字社愛媛県支部で赤十字救急法を受講していたからだと思います。私たち看護学生は、集中講義や普段の授業の中で、救急法について触れる機会が多いですが、他の学校では、そのような経験を積むことが難しいため、救急法の講義が1時間でもあれば、何か起こった時に実際にできることが増えるのではないかと感じました。私も処置をされた方々のように、素早く適切な判断、行動ができる看護師になるため、確かな知識と技術を身につけることができるよう、勉強に励みたいです。

## 3年生 井上 幹文

今回の人命救助に関して、初めてのことに戸惑いでしたが、2年生は素早い対応と的確な救命処置ができていたと思いました。緊張感のある経験ができ、今後の活動にも活かせると思います。

## 3年生 重川 裕吾

今回、2年生が中心となって、一人の命を救えたことは、本当に嬉しく思います。実習が終わって帰校し、記録を書いていたところ、後輩が「AEDの場所分かりますか？」と声をかけてくれ、今回の出来事に関わることとなりました。3年間看護の勉強を行い、救命講習を幾度か受けていた僕自身でも緊張と恐怖を感じました。ですが、奥歯を噛み締め、ひとつの命を救いたい一心で自分ができることを行いました。それは、他の学生たちも同じだったと思います。

今回、人として当たり前なことをしたまでですが、一人の命が助かったこと、それに携われたことはとても嬉しいことです。これから先、同じような場面に出会った方のために受け継いでいきたい。そう思います。

## 看護学科教員 木原 知穂

私は学生の要請を受け、教員のなかで一番に現場に駆け付けました。有資格者であっても、思わず手が震えてしまうほどの緊迫した状況でした。それでも学生たちは自分にできることを冷静に考えて連携することができていました。私が咄嗟に指示したことはすべて学生自身の判断によって遂行されており、おかげで迅速な蘇生に繋がりました。

看護学生という立場で、持っている知識を総動員して的確な対応ができた皆さんに対して、尊敬の念でいっぱいです。このような使命感溢れる学生たちと一緒に学んでいけることを嬉しく思います。これからも教員として真摯に向き合っていきたいと、改めて背筋の伸びる思いです。

## 看護学科教員 酒井 淳子

私が現場に到着した時点で既に学生により心肺蘇生が行われていました。臨床現場では長くいろいろな経験をしてきた私ですが、なりふり構わず蘇生を交代したものの、張り詰めた場の雰囲気手足が震えました。そのようななか、「蘇生を続けてください」という声が聞こえ、学生が持つスマホの向こう側からCPR（心肺蘇生）の映像情報を見ている消防指令員からの指示だとわかり、とても心強かったです。後で「ライブ映像119」という導入されたばかりの映像通報システムだったとわかりました。

今回、学生たちによる発見から救急隊に引き継ぐまで、わずか7分程度の短い時間で命を繋ぐことができました。学生たちが学び成長するプロセスの近くで寄り添えることに喜びを感じております。

2024年4月に現在の人間健康福祉学部看護学科は看護学部看護学科となります。スクールモットー「Charity for Your Neighbours」（あなたの隣人を大切に）を心に刻みながら、より一層地域に貢献できる専門性の高い看護師養成に努めて参りたいと思います。

## 【あとかぎ】

12月14日、松山市中央消防署において人命救助者表彰（団体）を受け、同日、夕方には、愛媛県立中央病院救命救急センター長と愛媛大学医学部教授らが、ヒアリングのため来校され、学生たちの勇気とチーム活動を称賛されました。12月20日には、学長から人命救助に関わった学生11名に特別表彰状が授与されました。

※テレビ局取材はニュースとして放映され、動画視聴できますので、どうぞご覧ください。

YouTube タイトル：[救命] 12人のリレーでつないだ命  
〈NEWS CH.4〉南海放送



愛媛県立中央病院救命救急センター長らのヒアリング  
(市駅キャンパス 2023年12月14日)



人命救助の現場でテレビ局取材を受ける学生たち

## クリスマス イルミネーションの点灯について

冬の風物詩となった聖カタリナ大学のイルミネーション。  
12月上旬、北条キャンパスと松山市駅キャンパスにてクリスマス イルミネーションの点灯を開始しました。

構内はカトリック大学らしい幻想的な光に彩られています。

日没後には、  
学生にとっても  
期間限定のイン  
スタ映えスポッ  
トとなっています。



## 2023年度学長賞を授与

スポーツ・ボランティア・文化活動で活躍した学生及び団体  
に対する学長賞の授与が、12月20日（水）学内クリスマスに  
おいて行われました。

今年の受賞者は以下の皆さんです。（敬称略）

### 【スポーツ表彰】

クライミング部 阿部央彦さん（健康スポーツ学科）

サッカー部（団体表彰）

女子バスケットボール部（団体表彰）

### 【文化活動表彰】

大学祭実行委員会（団体表彰）

ダンス部（団体表彰）

### 【学長特別表彰】

人命救助 看護学科（団体表彰）



## 「令和6年能登半島地震被災者支援」募金について

令和6年能登半島地震による被災者の皆様には心よりお見舞い申し上げます。

この災害による被災地の方々を支援するため、聖カタリナ大学・聖カタリナ大学短期大学部では、募金の受付を行いました。  
このたび、学生・ご来学の皆様および教職員が寄付した73,320円について、日本赤十字社愛媛県支部を通じて被災地に送  
らせていただきましたので、御報告いたします。

ご協力をいただいた皆様には感謝申し上げます。

なお、今回の募金活動については、これからも北条キャンパス玄関、松山市駅キャンパス事務カウンターに募金箱を設置し  
て継続いたしております。

学生・教職員の皆様には引き続きご協力をいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

## ご寄付のお願い【教育振興募金のご案内】

学校法人聖カタリナ学園は、2025年に創立100周年を迎えます。

聖カタリナ学園では聖カタリナ大学・聖カタリナ大学短期大学部の教育事業を永続的に発展させるため、  
また、教育環境の維持、充実を図るための支援として、皆様からの募金のご支援を受け付けております。

趣旨をご理解いただき、ご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

### 【お問い合わせ・お申し込み先】

学校法人聖カタリナ学園 法人本部事務局 〒799-2496 愛媛県松山市北条660番地

TEL 089-993-1300 FAX 089-992-5616



# ようこそ就職課へ

就職課長補佐 蔵前 純二

就職課は、一般企業をはじめ福祉や保育分野への就職、公務員採用試験や国家資格試験の合格など、さまざまな進路を目指す学生をサポートしています。就職課が意識していることは、就職課と学生とのつながり、社会と学生とのつながりです。一人ひとりの顔と名前を覚えるくらいの距離感で学生と接しています。また、進路選択の幅を広げるために、就職課が社会と学生の調整役となり経験を積む場を提供しています。以下にその取組みの一部を紹介します。

## ■新たな企業発見!! 企業見学バスツアー (7月14日) ルネサス セミコンダクタ マニファクチュアリング 株式会社 西条工場

「西条市内のものづくり企業を知ろう」という企画で、半導体製造前工程を手掛けるメーカーの企業見学バスツアーを実施しました。大学・短大の学生7名がクリーンルームと呼ばれる最先端の製造ラインを見学しました。社員との交流会では、半導体の製造工程や市場動向、社会貢献などについて詳しく教えていただきました。さらに、仕事のやりがいや苦勞、今後の展望などについて活発に意見交換できました。



### 【学生コメント】

ツアーに参加して、半導体業界や生産工程など社員から具体的な話を聞くことができました。知らないことがたくさんあり、自分がどのような職業に就きたいのか、見つめ直す機会にもなりました。この経験を生かして、充実した就職活動ができるように頑張ろうと思います。



## ■学生と企業のコラボ企画 (第1弾) 会社案内チラシ作成 (9月7日) シブヤ精機株式会社

就職課とシブヤ精機株式会社の初コラボ企画として、学生と企業が考える会社案内チラシを作成しました。同社は青果物の選果・選別システムで国内トップシェアの企業です。幅広い人材を採用したい企業と地元企業を深く知りたい学生のニーズが一致し、企画が実現しました。3年生2

名と就職課員が訪問し、工場見学、入社3年目の技術系社員との交流会、役員へのインタビューを通して会社の魅力を探りました。訪問後、ビジネスアプリ Slack を活用してチラシを完成させました。完成物は、後期就職ガイダンスで約200名の学生に配布しました。学生視点の特徴的な取組みとして、愛媛経済レポート (10月2日付) で紹介されました。

### 【学生コメント】

訪問前からシブヤ精機さんの Instagram や Web サイトに目を通していました。最初は「入社するには専門的な技術が必要ではないか?」と考えていました。しかし、訪問して業界未経験の方も多く勤務していることを知りました。本学出身の社員は、学内説明会で初めて知り興味を持ったそうです。私自身も、今回の訪問が縁で製造業に携わる未来もあるのではないかと感じました。



## ■後期就職ガイダンス (9月20日)

大学2・3年生対象の後期就職ガイダンスでは、就職活動を終えた愛媛大学と松山大学の4年生2名をゲストに迎え、就職座談会を実施しました。「悩む前にまず行動してみる」「迷ったら就職課を活用する」などのアドバイスは、就職活動に向けて学生が一步踏み出すきっかけになったと思います。



これからも、就職課は社会と学生をつなぐ様々な機会を提供していきます。今を楽しみながらとりあえずやってみる。一緒に経験を積みながら、自分自身の未来を探していくのもいいと思います。全力でサポートします。まず行動してみましょう!!



映画は好きですか？ そして、映画館は好きですか？

私は本学の人間社会学科に所属する教員の黒田卓哉と申します。臨床心理学と教育心理学を専門と主張しながら、情報リテラシーや統計関連の授業を担当しております。本学に赴任するまでは大学教員のかたわら一人のカウンセラーとして、主に教育現場でのカウンセリング経験を積んできました。多趣味な人間であると自認していますが、その多くの中の一つが「映画館に行くこと」です。

大事なことは「映画を観ること」ではないという点です。映画“館”に“行く”こと。つまり、映画を観るために設計された構造の中で、映画を観るという体験が好きなのです。こだわりもあります。映画を観るときは、必ずポップコーンと飲み物と一緒に。ポップコーンはシンプルに塩味。飲み物はお手洗いに立ちたくならないよう炭酸やカフェインのないものであることが重要です。最も高い位置から劇場内を一望できるように、座る位置は一番後ろ。真ん中であればなお良しです。スクリーンを見上げる位置はいけません。首が疲れてしまうので。画面の大きさと音にもこだわって、できるだけ大きな画面と体も震えるような音響で楽しみたいものです。幸いにも本学がある愛媛県には、四国唯一となるIMAXデジタルシアター（すごい映像と音響が備わった劇場）がありまして、お気に入りのスポットです。次の日に余裕がある平日、できればレイトショーの時間帯、仕事帰りにお気に入りのおやつと飲み物をお供に、座り心地の良い弾力のあるシートに身をうずめて、映像と音響による非現実世界に没入する……そんな時間が、私の日常を彩ってくれています。

映画館という構造は、ある意味、カウンセリングにおける面接室の構造に似ているかもしれません。映画館は、映画を観るという体験にとって最適に設計された構造をしています。その構造は日常生活とは少し距離のある、いわば非現実的な空間を演出しているのです。その中で、人は映画を観ます。観るだけでなく、映し出された景色や空気の震える音を感じ、登場する人物たちの顛末に共感し、描き出される物語に没入し、自分自身の感じ方や考え方に影響を受けます（その影響こそが「感動」ですね）。一方で面接室は、カウンセリングを受ける（あるいは、する）という体験にとって必要な構造をしています。日当たりがよく、刺激物は少ないシンプルな内装で、静かで、清潔で、秘密が守られるよう閉じられていて……と、いろいろな条件がありますが、こういった設計が面接室を日常生活とは少し距離のある空間・時間にしています。日常生活とは離れた空間だからこそ、クライアントは自分の悩みを打ち明け、自分自身の生活や人生を語り、そうして共有された物語に

ついて、カウンセラーと一緒に様々な意味づけや作業を行うことができます。その中で、クライアントは感じ方や考え方を変化させていきます（それが「治癒」や「成長」とも言えます）。映画館も面接室も「日常生活とは離れた環境で疑似的に体験を積むことで、感じ方や考え方に様々な変化を得られる場所」であるという点に、カウンセラーである私は惹かれるのかもしれません。

もちろん、「映画」そのものも好きです。2023年は1月から、本稿を執筆している11月末までで24本の映画を映画館で観ていました。映画では、ほぼ必ず人の物語が描かれます。私は、子どもの頃から物語が大好きでした。さて、人間にとって心惹かれる物語には、古今東西、神話の時代から変わらない共通のパターンがあると言われていいます。それが、ヒーローズ・ジャーニーと呼ばれる道行です（Christopher, V. & David, M., 2013）。どこか満たされない日常を送っている主人公が、何かの兆しや使者によって境界を越え、非日常に巻き込まれる。巻き込まれた先で数々の困難に立ち向かいながら、時には何かを犠牲にして、感情や考え方への様々な影響を受け、日常に戻っていく。そうして戻った日常は、境界を越える前の日常とは同じではなく、何かが変わっている。その変化がポジティブなものであれば英雄譚と呼ばれ、ネガティブなものであれば悲劇と呼ばれるのでしょう。

この波乱万丈は、物語の基本構造であるとともに、人間の心のありようと重なるとも指摘されています（横田、2017）。つまり、適応状態にある心が、何かしらのきっかけで困難にぶつかったとき、一時的に不適応状態へと移りますが、様々な人の助けを得つつ自分を顧みながら、その困難に立ち向かう中で適応状態へと戻っていく。そうして適応状態に戻った人は、かつての自分とは変わっている、という流れです。物語の構造は心の成長のありようと重なるように、私には思えます。人の心の成長を映画と同じに語るのには不謹慎かもしれませんが、私はそういった人の心の動きそのものが美しいと感じるのです。それこそ、私が現在の職を志した理由の一つだったのかもしれません。学生たち一人ひとりの美しい物語を、一人のカウンセラーとして、あるいは教育者として、これからも見守っていく所存です。

出典

Christopher, V. & David, M. (訳) 府川由美恵 (2013). 物語の法則 強い物語とキャラを作れるハリウッド式創作術 KADOKAWA  
横田正夫 (2017). 大ヒットアニメで語る心理学 「感情の谷」から解き明かす日本アニメの特質 新曜社

# ゼミナールインタビュー

人間健康福祉学部 社会福祉学科  
近藤 益代ゼミ

## ゼミのテーマを教えてください。

私のゼミでは、障がい福祉の内容をゼミ生の関心によって取り上げ学んでいます。専門知は重要です。しかしそれ以上に、学生には、専門家の知識に偏らないよう、当事者ご本人やご家族の存在、そして想いを大切にすることを伝えています。

10月には、2023年度愛媛銀行寄付講座「SDGs 共生社会の実現を目指して」にゼミとして登壇する機会をいただきました。「目に見えない障がいを伝えたい—きょうだい児からの発信」と題して自閉症の兄・弟を持つきょうだい2名を中心に、ゼミ生全員で発表準備をしました。受講者が障がいを頭で理解するよりも、心に残る内容を目指しました。その方が、共生社会の実現につながると考えたからです。イラストを描くことが得意なゼミ生が漫画を手がけてくれたこともあり、印象に残る講義にできたと思っています。

## ゼミの特徴を教えてください。

通常は、ゼミ生一人ひとりが研究テーマを決め、文献の内容をまとめ考察を発表しています。現在は、ゼミ生の「やってみたい!」と思ったことや、大学生活の思い出に残る活動に比重を置いています。先ほどの愛媛銀行寄付講座への取り組みをはじめ、大学祭でのポスター発表(展示)、また、学生さんと一緒に活動したい、学生さんの意見を聞きたい、など外部団体からお声かけいただいた際には可能な限り参加しています。何をするにも、ゼミで話し合っ決めていきます。

ゼミの時間では、当たり前のように感じることや、些細なことでも問い、議論を重ねています。ゼミ生はとても思いやりがあり、いつも笑いがあるので、議論は楽しいものです。ゴールまでのプロセスは大変充実したものになっています。



## ゼミのスタイルを教えてください。

私は学生時代に、障がい福祉に携わる方々と一緒に活動する機会を先生からいただきました。周りは実践者や当事者ですので、学生の私は知識量の差などのため会話についていくのも大変で涙することもありましたが、その人脈に卒業後の仕事でも、そして教員となった今も助けられています。貴重なご縁をくださった先生には感謝しきれません。

ゼミ生に私の体験を押し付ける気持ちはありませんが、福祉に携わる方々と出会う機会を設けていきたいと思っています。今後は学外の福祉に関するイベントにゼミ出店ができるよう、何か「ゼミの出し物」をつくりたいと思っています。一人ひとりが得意なことで力を発揮し、みんなで挑戦し、さらに学びも深められる、そんなゼミであり続けたいです。



## 近藤 益代ゼミは こんなゼミ

近藤ゼミは常に和やかな雰囲気、かつ障がい分野に関して興味をもって活動している人で構成されているため、意見が言いやすく、質問をすればその場の誰かが答えてくれるとてもいい環境です。そして意見交換をすることで、理解を深めています。

寄付講座の発表では、絵の上手いゼミ生は絵と漫画を担当し、実際のきょうだいである2人がメインの発表担当、その他の人は添削や配布資料の作成などを担当し、各々の仕事を助け合いながらこなし、発表の後には固い絆が生まれました。

和やかな雰囲気すぎて少し心配になる部分もありますが、近藤先生が時折持ってくる外部での活動の話には積極的に参加し、文字や言葉の一つひとつにも妥協しないメリハリのある活動ができます。みんなで笑いながらも真剣に活動する、いいゼミだと私は思います。

社会福祉学科3年 中島 虎也

## クラブ紹介

## 女子バスケットボール部

女子バスケットボール部は、2021年度に創部された強化指定クラブです。初年度は部員2名からスタートしましたが、2022年度は7名の入部があり、一色建志監督のご指導の下、週4～5日練習をしています。初めての公式戦は2022年5月の全四国大学新人大会でした。自分たちが一からデザインした新品のユニフォームを着ていざ大会へ。初戦は緊張で思うようなプレーはできませんでしたが、見事初出場初優勝を収めました。現在は、部員10名で活動しており、1・2年生の若いチームです。大学バスケットボールにおいて最も大きな大会は、「全日本大学バスケットボール選手権大会(インカレ)」です。私たちは、四国代表として2年連続出場を果たしました。



先日大会を終えましたが、1勝1敗でトーナメント進出は果たせませんでした。「勝っていたのに…」と大変悔しい結果となりましたが、悔しさを胸に私たちはまだまだ成長し続けます。今のうちに強い相手と対戦できることが今後の成長材料です。来年度はより上を目指せるよう、頑張っていきたいと思います。



女子バスケット部の活動をSNS等で投稿しています。今後は、バスケットボール教室への参加や近隣の小・中学校へも足を運び、バスケットボールの魅力を伝えることや、聖カタリナ大学女子バスケットボール部のファンを増やせるよう、社会活動にも力を入れていきます。

今後とも、応援のほどよろしくお願い致します！

## 教員著書紹介

### 『地方発 多文化共生のしくみづくり』

徳田 剛・二階堂 裕子・魁生 由美子 (編著)

出版社名／晃洋書房

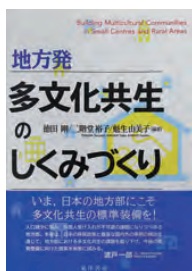
発売日／2023年10月20日

ページ数／総数269頁

村岡 則子・大黒屋 貴稔 (聖カタリナ大学教授)

近年、日本は、少子高齢化や人口減少を背景に、深刻な労働力不足にみまわれている。それは国難といっているほどの広がりをもつ問題であり、大都市圏のみならず地方圏でも、そこで働き生活する外国人の姿を目にする機会が顕著に増えてきた。

本書はこうした現状をふまえて、日本の地方部における多文化共生の実態や課題について掘り下げるとともに、今後の体制整備に向けて、多様な提案を試みた1冊となっている。本書は2部から構成されており、



第1部では、「地方部のローカルガバナンス構造という枠組みに沿いながら、多様な組織・団体・スタッフがいかんして互いに連携しつつ、外国人の受け入れや多文化共生等の課題に取り組んでいるか」、諸事例の克明な検討をもとに明らかにされている。第2部では、カナダやドイツ等の先進的な移民政策とそれに基づく地方部での積極的な外国人受け入れの現状が概観されたのち、日本の地方部に関するより望ましい外国人の受け入れ体制や多文化共生の「新たなしくみづくり」について、構想・提案されている。

聖カタリナ大学人間健康福祉学部所属の教員4名が以下の章の執筆を担当している。

第7章「地方部の製造業と外国人労働者」(大久保元正ほか)

第8章「地方における外国人介護人材の受け入れの現状と課題：愛媛県今治市島嶼部の介護事業所を事例として」(大黒屋 貴稔・村岡 則子)

第10章「日本の地方社会における医療通訳の提供体制：担い手となる『活動資源』の視点から」(田村 周一)

大学  
ドローン動画



大学  
公式LINE



※LINEのQRコード読み取り画面でスキャンするとLINEの友達に追加されます。

大学公式  
Instagram



受験希望  
の方



大学HP



保育学科  
ブログ



学校法人 聖カタリナ学園

聖カタリナ大学

カタリナひろば vol.36

編集・発行

広報委員会

〒799-2496 愛媛県松山市北条660番地

TEL (089) 993-0702 (代)

kouhou@catherine.ac.jp